学校便り「尚徳」１月号
第４８５号
鳥取大学附属小学校
平成２５年１月１７日
http://www.fuzoku.tottori-u.ac.jp/~fusho/
題字「尚徳」は，住川英明教授（地域学部）

言葉で繋がる・言葉の力

副校長　　北村　順子

平成２５年，あけましておめでとうございます。

今年は巳年。「巳」の漢字は蛇の象形文字。今まで冬眠をして地中生活をしていたヘビが，春になって地表に這い出し，新しい地上活動をすることを意味しているそうです。また，「巳」の音読みは「シ」。物事がいったん終結し，また新たに出発するという意味を含んでいるそうです。いずれも，未来に向かって一歩踏み出すという意味が込められていることを知ると，明るい光が差し込んでくるように感じます。

一昨年の東日本大震災以降，「家族の絆」，「人との繋がり」の重要性が再認識されてきました。お正月を家族で過ごす人が増え，「お節料理」の売れ行きもすこぶるよかったと聞きます。「絆」を深めるために，「繋がり」を強めるために大切になってくるのは言葉だと考えます。「言霊」という言葉があるとおり，古来から日本人は言葉には魂が宿るととらえてきました。言葉に出すことによって，気持ちが伝わります。

言葉で繋がる第一歩が「挨拶」です。朝一番の「おはようございます」に始まり，夜眠るときの「おやすみなさい」まで，私たちは，そして子どもたちは一日のうちでどれだけ挨拶を交わすことでしょう。「交わす」という言葉通り，「挨拶」は一人では決して行いません。相手があってこそ，相手を意識してこそ成立するものです。家族で，友達同士で，近所の方と，自然に挨拶の言葉が出るようになることが，コミュニケーションの基礎になってきます。

そして大切にしたいのが「ありがとう」に代表される「感謝」の言葉。小さなことでも，周りの誰かに助けてもらったり，親切にしてもらったりしたときに，素直に「ありがとう」が言えることは素晴らしいことです。「ありがとう」は「有り難し」から来ていて，「めったにない珍しい　貴重だ」という意味です。相手が自分にしてくれた行為を当たり前として捉えるのではなく，「有り難い」こととして捉えるから「ありがとう」なんだと考えると，「周りに生かされている自分」，「周りに支えられている自分」に改めて気づく感があります。そして，「ありがとう」の一言で人間関係は円滑になっていくものです。

相手が聞いて，温かい気持ちになる言葉も大事です。「よかったね」「がんばったね」等，周りの人の喜びを自分のものとして捉え，心からのエールを送る言葉や，「ごくろうさま」という労いの言葉をかけられることによって，人はどんなに勇気づけられ，前向きになれることでしょう。言葉のもつ力って本当にすごいものだと感じます。

明るい挨拶が交わされ，「ありがとう」や心が温かくなる「ほかほか言葉」がたくさん行き交う家庭づくり，学校づくりをめざしていかなければならないと考えます。それには，まず自分自身が周りの人に感謝し，思いを素直に表す言葉を積極的に発していこうと思いを新たにしました。

思い立ったらすぐ実践。今日の朝は階段掃除をしてくれている環境委員会の子どもたちに「きれいにしてくれてありがとう。」，一生懸命剣玉練習に励んでいる一年生の女の子に「わあすごいな。上手になったね。」と言った私です。どちらも言葉を聞いた後，にこっとすてきな笑顔を返してくれました。

【学校保健委員会】

１２月１３日に第２回学校保健委員会を開催しました。

本年の子どもの生活習慣の様子を，１０年前の本校の児童のデータと比較しました。その結果，「早寝・早起き・朝ご飯」の生活習慣が向上していることが明らかになりました。これは，保護者の皆様の努力の成果であると思います。学校医の先生方も褒めておられ，ぜひ今後も続けて欲しいと話されていました。

また，鳥大地域学部の関耕二先生から，本校児童の体力の現状と課題について講演をしていただきました。本校の総合得点は，全国平均と同等かそれ以上なので，体力が低いとはいえないという結果でした（詳細は学校保健だよりを参照）。

全国的に子どもの運動習慣の二極化が問題になっています。子どもが体を動かす時間を１日６０分以上確保することが大切であると話されていました。

運動を日常的に継続することは，子どもも大人も健康な生活を送るためには重要であることはよく知られています。これを機会に，親子で運動習慣の大切さについて見直してみてはいかがでしょうか。